

震災レポート (2) 目次

- 1 . 真の支援
- 2 . 避難所生活者のホンネ
- 3 . 宅地被害
- 4 . 地震の前兆現象と液状化の怪
- 5 . 略奪行為
- 6 . 地元産業と雇用
- 7 . 地方自治と国の安全保障
- 8 . 津波の歴史と防災へのヒント
- 9 . 余震
- 10 . 火事場のバカ力(ちから)
- 11 . 「頑張ろう日本」の最大のハードル

東北支部 吉川 謙造

1. 真の支援

今回の地震で、被災地に住む私たちに対して、全国の各地から「何か支援出来ることはないか」と、有り難い問い合わせが少なくない。1000年に一度なのだから、もう二度とチャンスは無いと思う、何でも遠慮なく言って欲しいと言ってくださる方もいらっしゃる。

しかし、私自身で言えば、家と家族の被害はごく僅か、真に不自由だったのは電気と電話が通じない4日間位、あとは逐次水道・ガスと復旧し、今はガソリンの心配もなく普通の生活に戻っている。

先日の強い余震で再び停電・断水に戻った地域もあるが、幸い自宅は大丈夫だった。

しかし、津波と原発による被災者は今も大変な状態である。肉親を亡くし、家を失い、身を寄せるところもなく親子4人で避難所生活を送っている人や、自分の家は大丈夫だったが、被災地に住んでいた兄弟、あるいは親戚を受入れて、2世帯、3世帯で暮らしているといった家がすこぶる多い。

しかもそれらの人たちが、今度は自らが被災地に出かけて、短期間ではあるが炊き出しの手伝いをするなど、相互扶助関係が発生している。

組織的に何が出来るか、と聞かれれば、義援金の募金以外は実に千差万別、それも時期によって流動的で、昨日までは必要だったものが今日はもういない、という状態はしょっちゅうである。

市の職員も今回のような津波は初めてで、何をどのようにやったら良いか、方法も順序もわからないまま、目の前の仕事に追われて寝る暇もないという状況である。

その中で大阪のある公立大学で、過去に発生した津波（痕跡）の地質学的調査・研究を続けて、今回気仙沼市の要請で地震後直ちに現地調査に入った友人の話である。

その方は津波直後の海底地形を調査する目的で、水中カメラに近い水中サイドスキャナーという機械を持参したが、これが湾内に沈没している船舶や、溺死者の死体探しに有効であることがわかり、連日その調査に奔走するハメになった。そしてその情報にもとづいて自衛隊が沈没船を撤去し、遺体を回収する作業が軌道に乗り始めると、いつの間にか自衛隊員がその先生の指示を待つようになり、頼まれもしないのにいつの間にか指揮官を務めることになってしまった、と笑っていた。

短期間とはいえ思い通りに自衛隊を動かすことにいささか快感をおぼえたようでもあるが、非常時に情報を持っている人、情報を集められる人、すなわち危機管理ができる指揮官（リーダー）が決定的に足りないことから、いつの間にか市の広報役までも勤めさせられたということである。

このことから分かるように、地方の小さな自治体で足りないのは、危機管理が出来る人で、町長と助役が亡くなって、いつの間にかそこに来合わせていた「どこかのしっかりした人」が指導者の代行を務めるハメになった、という話も報道されている。

被災した自治体では、上位機関の県に応援の人材派遣を要請しているが、県の方でも人手が足りず、国の方に要望をあげているということであった。

しかし国（どこが窓口かは不明）からは「なしの礫（つぶて）」、いつまで待っていても仕方がないので、そこにいる人間で何とか対応しているということであった。

真の支援とは何か、考えさせられた話である。

（2011.4.10）

2. 避難所生活者のホンネ

今回の地震と津波では、未だ連絡がつかず、所在がつかめない人たちもいる。

実数がかつめたただけでも、原発避難者を除いて1,000以上の避難所に10数万人の避難所生活者がい

る。

これらの避難者は、自宅を失い、頼るべき身内の無い人たちがほとんどであるが、中には家が残されていてもライフラインが断絶しているため、指定された避難所で集団生活を余儀なくされている人たちもいる。

またその中には半壊の家が残っていて、防犯の意味もあってか、寝るときは自分の家に帰り、食料の配給時だけ避難所に集まってくる人達もいるなど、千差万別である。

避難所生活の不便さは、そこで実際に生活した人にしかわからない。

仮設住宅の建設戸数も十分でないため、入居希望者の競争率は高い。

行政は職員数の不足と、救援物資の輸送・配分や健康管理の効率化の必要性から、小規模な避難所をできるだけ集約して1ヶ所に集め、管理を容易にしたいと考えるのも当然といえる。

しかし、一見不自由そうなこれらの集団が、なかなか言うことを聞いて動いてくれないことがあるという。理由は種々あるが、その一つは以下のような理由だと聞かされた。

それは、現在の避難所が昔からある井戸に至近の場所で、自分たちの家には十分な米と味噌の備蓄があるので、寒い学校の体育館などに行かなくても比較的不自由なく暮らしていけるといなのだ。

そんな人たちは、無理に今居るところから動かして欲しくないと思っている。

こんな避難民に対しては、すべてに画一的な対応でなく、本人たちが望む形の支援が望まれる。

(2011.4.10)

3. 宅地被害

33年前(1978年)の宮城県沖地震では、伊達政宗時代の都心部(地盤が良い広瀬川の段丘面)は被害がほとんどなかったが、戦後のS30~40年代に造成されたM住宅団地(丘陵地)の盛土の被害が大きかった。

1978年当時は、危険な宅地には移転勧告が行われ(市が時価の半分以下で買上げ)、今は防災緑地(=居住禁止の砂防指定地)になっている。

一方、若干の手直し程度で居住可能と判断された宅地は、所有者の自己判断にゆだねられた。しかし、30年以上が経過してもその宅地の地盤が安定化することはなかった。

現在の法律では、個人財産(土地)のすべてを公的資金(税金)で守ることはできない。

公道(バス道路)に面したごく一部に地這り対策(杭打ち)を実施し、あとは集水井戸を掘削して盛土内の地下水を低下して安定化を図ったのみである。

地下水低下の効果は10~15年程度で薄れるので、また地震がくれば、同じように地割れができて被災する危険性は分かっているにもかかわらず、新しい土地に移転する余裕がない人たちは、「自分が生きているうちに、もう2度と大地震は来ないだろう」という判断からか、同じ場所に住むことを選択した。

しかし、今回もこの宅地が前回と同様に被災した。

危険な宅地は移転させるという政策が、正しかったことが証明された形となった。

ただし、1978年当時すでに造成されていた宅地で、被害が無かった所も少なくなかった。また造成地の盛土がすべて危険というわけではなく、十分な管理の下に慎重な造成を行えば大丈夫。また切土部分は地震でも安全であるという結論も得られていた。

しかし、仙台市西部のS団地は、前回は被害が無かったにもかかわらず、今回は被害が発生した。

その結果からは、今回の地震は前回より大きかったことが知られる。

今回被災した宅地は、判定員により「危険宅地」の札がはられ、住民は1ヶ月の避難所生活を送っている。市はこれから地盤の判定を委員会等にゆだね、住民はその判断の下にもとの生活にもどるかどうか決断することになる。いずれにしても将来の不安は消えず、知らずに不良な宅地を購入してしまった後悔は、一生涯消えることはないだろう。

(2011.4.10)



(太白区 M団地)



(青葉区 S団地)

4. 地震の前兆現象と液状化の怪

巨大地震の前に「地震雲を見た」、「発光現象を見た」とか、「動物が異常な行動を取った」など、後で気がつく前兆現象（そういえばあのとき・・・ということがらで、なまが騒ぐもこの類？）が報告されている。その科学的根拠として、地震の直前に地中からある種のイオンの放出、またはそれによる電磁波の乱れがあり、これを動物が感知できるのではないかということで、日本各地でそのような電磁波を測定するネットワークが形成され、いくつかの地震はそれによって予知できたというので、連日のように予測が発表されたこともあった。しかしその予報があまりにも頻繁で、当たらないのも多いため、また発生場所についてはかなり不正確（東北や関東で九州地方の地震を検知（？）したなど）という疑問・問題点も生じて、今はこのフィーバーは下火になっている。

今回の巨大地震も、この観測網で予測できたという報告は無いようである。

しかし、地震の直前にキジが道路に出てきて逃げなかった、一週間前からネズミが一匹も居なくなったと聞かされ、33年前の地震の時も、カッコウが「ガコ、ガコ」と変な声で鳴いていたなどという前兆現象（？）が報告されている。

今回の地震にともなって地盤の液状化が発生している。特に埋立地にある東京ディズニーランドでは顕著な液状化現象（地盤の流動化と噴砂）が発生したと伝えられている。

まだ現場調査を実施していないが、宮城県でも地盤の液状化が発生した。ただし前回（1978年）に多く見られた海岸部ではなく、より南の内陸部に多いということである。

その理由はある程度推定できる。一度液状化が発生したところは、地盤が締まって（水と砂粒子が混じった状態から、砂と水が分離して水は噴水のように地表に噴出し、砂の部分が下方に沈殿し

た) 同じ程度の揺れでは、液状化が起きにくくなっているのではないかとと思われる。

ところで、今回報告したいのは、仙台市太白区泉崎という所で発生した小規模な液状化である。それは地震の最中でなく、前日に発生した。

大地震の当日はさらに大規模な液状化現象が発生し、黒い水が勢いよく吹き上げたというのだから間違いのないと思う。前日のそれは小規模で、地表に細かい砂が溜まっていたので気づいたという。

地盤の液状化(噴砂)が、地震の最中でなく前日に生じたというのは今回初めてである。

この箇所は有名な活断層「長町 利府構造線」から数百mという至近のところであるから、この断層線に沿って何らかのヒズミが伝達され、それによって小規模な液状化が発生したという推定が成立つ。

特に今回の地震では海底が20数mもずれており、女川半島の先端が数mも移動し、内陸部では広範囲に1m近い地盤沈下が生じたのであるから、地震の前日にその変状やヒズミが活断層に沿って伝達されて、液状化が発生したことは否定できない。

もし観測を行っていれば、急激な地下水の変動が記録されたかも知れない。

しかし、これらに気づいたからといって、そこから120km以上も離れた海の底でマグニチュード9の巨大地震の発生を予測できたかという、これは疑問である。多分出来なかったと思う。

変わったことがあるなアと首をかしげたかも知れないが、これをもって「いつ」、「どこで」、「どの程度」の地震が起きるかを知ることは不可能だったろう。

このように、数々の不思議な現象(宏観異常現象)が観測されつつも、地震予知は進化していないのである。

(2011.4.10)

5. 略奪行為

日本人の倫理的な行動が世界の賞賛を浴びている。

特に東北人は寡黙だが、粘り強く、礼儀正しいといわれている。

ガソリンが不足したときも、給油スタンドには前日の夜や早朝から数時間以上も我慢強く並んで待った。この長い車の列が、狭い道路をふさいで路線バスなど大型車の通行を妨げたが、バスの方が運行コースを変更して、混乱や交通渋滞を未然に防いだ。また、地震直後の停電でも主要道路は大渋滞したが、その際にも交差点に進入した車は譲り合って、右折車も通行できるようしたので、みんな無事に帰着いたようである。

しかし、津波に流されて放置した自家用車からは貴重なガソリンが抜き取られ、タイヤも盗まれ、避難家屋への空巣も多く発生した。また地震直後の停電の中、ある大手のショッピングモールでは、かなり多くの客が商品をだまって持ち帰ったことが目撃・報告されている。

この犯人は日本人なのか、それとも外国人だったのかは分からないが、日本人も混じっていたことは事実である。

ある人が、被災地の避難所の慰問に行く途中、津波で半分潰れた酒屋から、多量の酒を持ち出している人を見咎め、それを避難所にいる知人に話したところ、「それは略奪とは言わないんだ」と教えられたという。

それはどうしてかということ、みんなギリギリの生活をしているのだから、売物にならない商品を

少々持ち出しても、それを役立ててもらえるなら良いのではないかと、みんな暗黙の了解をしているということであった。何も持たずに避難してきた人が、やむにやまれず他人の家から下着などを持ち出しても、それは略奪とは言わない、というのであった。

極限の状態でも互いにいたわり合って生活している人たちの心は、ずさんでいるかも知れないが、弱者に対する優しい心は失われていない。

真の略奪とは、誰かが悪いことをするのを見て、そんなら自分もという心を抑えきれず、統制が利かなくなる状態を言うのであって、誰かが悪いことをするのを見て、自制心を発揮できる良識を持つ人が大勢いれば、略奪、暴動には発展しない。

汚いこと、卑怯なことを嫌い、公正な自制心を持つ日本民族は世界の宝である。

(2011 . 4.10)

6 . 地元産業と雇用

今回の災害の爪あととは大きく、未だ不明者の捜索が続いている。肉親や家をなくし、この捜索や後片付けをしながら避難所生活をしている人が多いが、命が助かった人は一日も早い復興を願っている。

しかし、寝るところと食料が確保でき、ライフラインが復旧しても、働く場所を失った人には大きな不安が消えない。それは仕事、すなわち永続的に収入を得る途の途絶である。たとえ家が無事で、災害見舞金や義援金をもらい当面の生活には一息ついて、30～50万円程度のお金は2,3ヶ月で無くなってしまふ。これでは将来の生活に大きな希望は持てないのは当然である。

前述の気仙沼湾内の調査を行った先生は、潮位の観測などに2人の被災者を雇った。時間給は1,000円、ほんの数日間の仕事で、総収入も2～3万円でしかなかったが、この人たちは本当に喜んで働いてくれたという。

自分の家も家族も悲惨な状況にあるのに、何よりも自分に「世の中の役に立つ仕事」があることが嬉しかったらしい。金額の多少ではない。仕事をさせてもらえるのが本当に嬉しいのだ。

地元で従来通りの仕事に就ければ理想的だが、船を無くし、養殖施設が破壊され、勤めていた工場が無くなったなどの人たちは、これからの生活が最大の問題点である。

これは原発事故で避難している人も同様であろう。

義援金を均等に配分することも、有効であろうが、今は自衛隊とボランティア、或いは他の地域から応援に来た業者がやってくれている、瓦礫の片付けや、仮設住宅建設工事などに、この一部を充て1日3～5千円でも良いから日当を支給して、被災者の中から労働希望者を募集することなども良い方法である。

もともと不況ではたらき口が少なかった地域である。そこに大きな復興需要が発生したにもかかわらず、他地域の人たちがすべてやってしまうのでなく、地元、被災者の中から元気な人を積極的に雇用すれば、10年近い需要が発生するだろう。1億総土建屋という陰口が聞かれるかも知れないが、それが地元の活性化の端緒となり、その中から産業が復活し、新しい産業の創造も期待できる。

被災地ではその仕組みを早急に整備したい。窓口になる役所が消滅した自治体もあるが、早急に八口ワークを開設し、被災者の中から勤労意欲のある人を募るのが最優先課題である。

復興の元気は、どんな仕事でも良いから、確実に社会の役に立っていると実感できる仕事に従事し

ている人から生まれる。

(2011.4.13)

7. 地方自治と国の安全保障

統一地方選が終った。その結果、色々な勝ち負けの判断はあろうが、北海道の高橋はるみ知事、東京の石原慎太郎知事など、実績のある人が選ばれた。

国家存亡のとき、国民は堅実かつ賢明な判断を下したと思う。

しかし当選直後のインタビューで石原知事は、4期目に何をやるかと聞かれて、これまで通りのことをやるだけ、それに東京の防災力アップだと答えた。

更に今の税制について国に不満をぶつけ、「東京で集めた税金を地方に持って行かれてしまう。これを自分のところで使えばもっと安全な首都圏が作れる」とも言っている。

記者達はこの勢いに押されたのか、それ以上深く突っ込まなかったが、私はこれを聞いて、もし東京だけでなく関東・東北まで含めた選挙なら、もっと違った結果になっていたかもしれないと思った。

今回の選挙では原発立地県以外は際立った争点は見られず、どの候補者も申し合せたように自分の自治体の防災力 up を訴えていたが、国のエネルギー・食料など安全保障問題とあわせた政策を主張した人はいなかった。

特に東京都は、福島原発の事故を対岸の火事か、自分は水道や野菜が汚染された被害者、あるいは決死の消防隊を派遣した善意の援助者の立場くらいにしか捉えていなかったのではないかと思う。

地方自治と国の安全保障は別問題かもしれないが、そこには整合性がなければならない。

たしかに首都圏と地方の所得格差は大きく、それにともなう税収差も大きいには違いないが、そこにはエネルギーや食料を他地域に依存して、リスクまで負担させているという認識はない。

しかし今回の事故では、リスクを引受けた形になった地元の怒りは簡単には収まらない。絶対安全の言質の下で、電源交付金というアメをもらい続けてきた地元知事の「だまされた」という言葉も当然である。

日本には過疎地域が確かに存在する。しかしそこは何もない不毛な地域ではない。狭い国土の中で、一つの地域が繁栄するためには、それに必要なものを提供し続けている地域もある。

今回の原発事故で、多くの識者が指摘している「環境ただ乗り論」が再燃するだろう。

環境税議論のスタートになり、環境受益者が負担すべき適正な税額が論議されても良いだろう。リスクと環境の活用を適正に考えなければ、持続可能な社会にはならない。

(2011.4.12)

9. 余震

今回の地震はズバ抜けて余震が多い。しかもその揺れが強い。従来の学説によれば、地盤が耐えられるエネルギーの大きさから、M8.6 が理論的限度で、その震源の範囲は 100 km × 100 km 程度であるといわれていた。しかし今回の地震はM9.0 という、わが国では初めての大きさで、何もかもが想定外であったといわれている。従って、余震の多さ、強さも想定外である。(下表)

東日本大地震後の主な余震(震度 5弱以上 2011年3月31日まで)

発生日時	震度	M	位置		深さ (km)	備考
			北緯	東経		
3・11 14:46	7	9.0	38°00	142°54	10	三陸沖(本震)

15:06	5弱	7.0	38°00	142°54	10	三陸沖
15:15	6弱	7.3	36°00	141°12	80	茨城県沖
16:29	5強	6.6	39°00	142°48	0	三陸沖
17:41	5強	5.8	37°30	141°18	30	福島県沖
20:37	5弱	6.4	39°06	142°36	30	岩手県沖
3・12 03:59	6強	6.6	37°00	138°36	10	新潟県中越地方
04:32	6弱	5.8	37°00	138°36	10	同上
05:42	6弱	5.3	37°00	138°36	0	同上
23:35	5弱	4.4	37°00	138°36	10	同上
3・13 08:25	5弱	6.2	37°54	142°00	10	宮城県沖
3・14 10:02	5弱	6.2	36°30	141°06	10	茨城県沖
3・15 22:31	6強	6.0	35°18	138°42	10	静岡県東部
3・16 12:52	5弱	6.0	35°48	141°00	10	千葉県東方沖
3・19 18:56	5強	6.1	36°42	140°42	20	茨城県北部
3・23 07:12	5強	6.0	37°06	140°48	0	福島県浜通り
07:36	5強	5.8	37°06	140°48	10	福島県浜通り
18:55	5強	4.7	37°06	140°48	10	福島県浜通り
3・24 08:56	5弱	4.9	36°12	140°06	50	茨城県南部
17:21	5弱	6.1	39°06	142°24	20	岩手県沖
3・28 07:24	5弱	6.5	38°18	142°24	0	宮城県沖
3・31 16:15	5弱	6.0	38°54	142°06	40	宮城県沖

< 3・11～3・31 に発生した余震のまとめ >

- ・震度1 以上の有感地震 803回
- ・震度4 以上の地震 103回
- ・震度5弱以上の地震 19回

M6～7級の地震がこんなに頻発するという事は、日本の地下の地盤の性質が変わってしまったのか、それとも本来地盤はこの程度のヒズミを蓄えられるものだったのか、最新の考えを早く知りたいものだ。

(2011.4.14)

8. 津波の歴史と防災へのヒント

(陸奥の国)三代実録には、陸奥(宮城県)を襲った貞観地震869年(貞観11年)の貞観津波の記録がある。「大きな揺れと発光現象があり、人々は地に伏して叫び、城や倉庫の崩壊多数、城下を襲った津波で原野と道路が海のようになり、溺死者は約千人に達した・・・」と被害の大きさを伝えている。

昔の人は石碑や神社を遺し「かつての津波はここまで来た」「ここから海側には住むな」と伝えている。仙台市若林区霞目の陸上自衛隊駐屯地の北東に近接して「浪分(なみわけ)神社」がある。

1100年前の貞観津波がここまで来たと伝えられ、東北大学で神社付近の地質調査を行い、その結果十和田火山灰(915年噴火)の下に、貞観津波による砂層が確認され、これより津波の到達は現在の海岸線から約3キロ(当時の海岸線から2.5キロ)と推定されている。



また、太白区の長町地区には、「蛸薬師」という神社がある。大津波のとき、この薬師堂の屋根に大ダコがからみついて、津波から守ったという言い伝えがある。ここに津波は到達しなかったと推定されるが、浪分神社のように津波の正確な到達位置を伝えているものではない。

この町内では縁日にはタコを食べない慣わしがある。

今回の地震と津波は、千年に一度といわれている。しかし仙台市の平野部に限定して見れば、というべきである。津波の正しい評価はこれからになるが、津波はもっと頻繁に発生している

例えば明治 29 (1896) 年、明治三陸地震 (M8.2、震度 2~3) 昭和 8 (1933) 年、昭和三陸地震 (M 8.1、震度 5) などがそれである。これら古い地震は正確な記録がないため、津波の発生機構がよく判っていないが、もう少し南で、そして浅い位置でエネルギーが放出されていたら、同程度の津波になっていたかもしれないと考えるべきである。

これらの地震 (津波) も含めれば、今回程度の津波は 60~120 年間隔で発生してもおかしくない。

そして、津波には 2 つのタイプがあるようである。一つは大きなエネルギーを有し、壁のような波となって襲い掛かってくるもので、万里の長城と呼ばれた岩手県田老町の延長 2.5 km、高さ 10m の防潮堤も軽々と越えてしまい、ほとんど役目をなさなかった。津波の大きなエネルギーは、波高だけでなく、鉄筋コンクリート製の電柱を曲げ、ほとんどの建物を破壊してしまう力をもっていた。引き波の力も大きく、気仙沼湾では海底が 10m も侵食されたという報告もある。

もう一つは「ゆっくり」と寄せてくる比較のおだやかなタイプがそれである。当然ながら後者の被害は格段に小さく、松島湾でその典型が見られた。しかし、湾内の漁船を転覆させ、養殖施設の一部を破壊していることから、相当のエネルギーを有していたことは間違いない。

このような津波に襲われたが、松島湾内の最奥部は、その周辺に比べても格段に被害が小さく、最終的には僅か 3 m 程度の防波堤で津波を防いでいる。沖合の島の存在、海底の地形等で津波のエネルギーを減殺できるという可能性から、新しい防災のヒントが生まれるかもしれない。(2011.4.14)

10. 火事場のバカ力 (ちから)

今回の災害 (特に津波) では、人間の力の限界を考え直すべきと思われる事象が、数多く報告されている。

80 歳を超えて、自宅の散歩程度しかできなかった老女が、消防団の「間に合わないからここに登れ！」の指示で、鉄筋コンクリート製の電柱 (電柱の下の方は、普通の人でも登れないように、手すりはない) に軽々とよじ登り、助かった。後で、本人も周りのひとも、どうしてここまで登れたのか、首をひねった。また、次のような事例は一つや二つにとどまらない。

普段は介護者に助けられて、やっと歩いていた老人が、「津波だ、逃げろ！」という声で、誰よりも早く、安全な場所まで走って逃げた。

自宅の2階や屋根の上で、首まで海水に浸かりながら朝まで頑張り、水が引き始めてから救出された、という人はかなり多い。3月とはいえ、翌日は雪が降ったくらいで、まだまだ海水の温度は低い。今までの海難救助の事例では、全身が水につかっていると、体温が急速に奪われるので数時間で生命が危ない、というのが常識である。

これらの事例は、どのように説明したら良いのだろうか？

よく火事場のバカ力（ちから）という言葉がある。非常時には人間の肉体的能力が平時の数倍になるということだが、これの医学的、生理学的な説明は完全に出来ていないとは言えない。

人間は明確な目標、例えば「明日の夜明けまで」といったような、具体的な期限があれば、そこまでは生命力を発揮し続けられる。南米チリの33人生理め事故も、外部との連絡が付き、絶対助けに来てくれる、という確信と希望があったればこそ、全員が生き抜けたのだと思う。

それでは何がそのような力を出させるのか？たとえばアドレナリンのような生命力に富むホルモンが大量に分泌され、それが生きる力を増大させるのであれば、死に直面した人に、短時間であってももう一度生きる力を与えるなど、新しい医療の道が開けるのではないだろうか。

(2011.4.18)

11. 「頑張ろう日本」の最大のハードル

「日本は一つ、頑張ろうニッポン」今、どのメディアを見てもこの合言葉である。

このスローガンに水をさすつもりは毛頭ないが、本当に大丈夫だろうか？という思いが先に立つ。

今回の災害は、第2次大戦後の廃墟を思い出すとか、17年前の阪神淡路大震災の経験があるから、絶対大丈夫・乗り切れるという意見がある。しかし同じ状態ではない。

頑張るための絶対の条件、それはみんなが一つ心になるということで、そのためにはスタートと方向（着地点）を明確に示し、国民の心を完全に一つにしないと行けない。

その点で今回の事故は難しい問題を抱えている。

それは原発事故である。東電は自分のことで精一杯だろうが、政府はしっかりした認識を持たないと、不平・不満の声が大きくなって、国民の心を一つに出来ない恐れがある。

地震・津波という自然災害に対しては、国民は冷静に事態を受け止めて、お金の問題はともかく、早く復旧・復興に向かうことを全員が望んでいる。その点で戦争からの復興も、阪神淡路大震災も、スタート時点と方向は明確で、民心は完全に一つになることが出来たといえる。

しかし原発問題はきっかけが自然災害であったとはいえ、人災の要素が大きい。そして、最大の問題はいつスタート地点に立てるかということだ。数ヶ月～何年もの間、生殺し状態に置かれる住民があることが事態を複雑にしている。

被災者を含めて「やりたいのに、何もさせてもらえない」という状態はヤル気を失わせる。

技術的な問題は難しいかもしれないが、これを東電と原子力安全委員会任せにせず、少なくとも民心の安定には、政治の強いリーダーシップが必要である。

今の日本に必要なのは、国民の心を一つにできる指導者だと思う。

(2011.4.17)